

教 昊 寺

— 第一次発掘調査概報 —

1985年

安来市教育委員会

序 文

教吳寺は、和銅6年（713年）政令により作られた、風土記の中で最も完全な形で現在に伝えられている出雲国風土記に寺名で記載されている唯一の寺院であります。そこには「五重塔を建立」とあり、その大伽藍は出雲富士を仰ぎ、実り豊かな能義平野を望む丘に、壯麗なたたずまいを見せていたものと考えられます。

このたび、この古代出雲の仏教文化に限りないロマンを秘めた教吳寺跡を、幻想の世界から考古学の実証的視点により歴史的事実としてとらえようと試みました。これは、永い間の関係者の熱い宿願が実ったものであり喜びにたえません。歴史的回帰を試みるこの調査は安来市が昭和59年度から図、および県の補助をうけて3ヶ年計画で実施いたしました。

今回の発掘調査に關係して、地元野方町の方々をはじめとして、調査のご指導、及びご協力をいただきました関係者各位に衷心より感謝申しあげますとともに、この調査により教吳寺跡の全貌が解明されて、郷土の文化財愛護の心を培う励みとなりますことを祈って止みません。

昭和60年3月

安来市教育委員会
教育長 佐藤 貞三

例　　言

1. 調査は安来市教育委員会が国庫補助及び県費補助を得て、昭和59年8月2日から10月6日にかけ実施した。本書は安来市野方町地内教吳寺跡の保護を目的として、発掘調査を実施した報告である。
2. 調査にあたり以下の方々の指導を得た。

教吳寺発掘調査指導委員会

山本　清（島根大学名誉教授）
渡辺貞幸（島根大学文学部助教授）
門脇等玄（安来市文化財保護委員）
勝部　昭（　　“　　”）
上原真人（奈良国立文化財研究所文部技官）
永塚太郎（島根県教育委員会文化課埋蔵文化財第1係係長）
西尾克己（　　“　　”　主事）（順不同）

3. 本書の執筆、編集は上原真人（奈良国立文化財研究所）と永見英が行った。
4. 本書で使用した方位は磁北である。
5. 発掘調査で出土した遺物は安来市教育委員会で保管している。

（敬称略）

教吳寺発掘調査関係者一覧

調査主体	安来市教育委員会
地元協力	石倉マサ子、稻田喜美子、稻田貞子、稻田輝子、稻田春子、大谷晃二、川中聰、沢田陽、竹内静子、原裕司、横原充昭
協力	石倉昭嘉、稻田行雄、竹内千之
事務局	（アイウエオ順） 安来市教育委員会社会教育課 課長　青戸邦晃 係長　市川博史
調査員	永見英（安来市教育委員会社会教育課）

（敬称略）

日 次

I 章 調査に至る経過	1
II 章 歴史的環境	2
III 章 調査概要	4
IV 章 瓦について	5
V 章 まとめ	9
付論 教吳寺出土軒瓦の再検討	11

1章 調査に至る経過

キヨウコウジ

教吳寺は『出雲國風土記』（以下風土記とする）意宇郡の章の中に「教吳寺，在舍人郷中，郡家正東廿五里一百廿步。建立五層之塔也有僧，教吳僧之所造也散位大初位下上腹首押猪之祖父也」と記載されている古代寺院である。現在、この寺院跡について、その所在位置を示す地名及び伝承などはまったく残されていない。それは江戸時代においても同様であったようで、風土記の註解書である『出雲國風土記考』、『出雲國風土記解』のいずれにおいても『出雲國風土記鈔』をもとに、教吳寺の所在位置について安来市清水町に所在している清水寺か、としている。これは、教吳寺が江戸時代より以前に廃絶されたことを物語るものと考えられる。

しかし、考古学的視点より教吳寺の所在が問題にされるようになると、布団瓦、塔の基礎などの存在から野方町真ヶ崎が通説となっている。

昭和55年7月から3ヶ月間、この教吳寺が所在するとされる野方町真ヶ崎の西方約400mの部分を、県道米子広瀬線の道路改良工事に伴い、緊急発掘調査を実施した。この調査により、3間×1間の掘建柱建物が検出された。桁行が1間なのは、県道の新設時に一部は消滅したものと考えられる。この建物跡の周辺及び柱穴内より炭化米が出土したことから風土記に「舍人郷、郡家正東廿六里、志貴嶋宮御宇天皇御世、倉舍人君等之祖日置臣志毗、大舍人供奉之。即は志毗之所居。故去舍人。即有正倉。」とある正倉に伴う建物跡の一部ではないかと注目された。この取扱いについては道路の公共性が重視され建物跡は消滅することになったが、このことより教吳寺、正倉のことが顧みられる契機となり、安来市教育委員会として近年中にこれらの学術調査を実施する必要があるという考えに至った。

昭和58年7月19日に行なわれた宇賀荘地区の市政座談会の席上で、教吳寺跡を明確にすべきではないかという意見が出された。現在、教吳寺所在地とされる野方町字真ヶ崎周辺は宅地化が進んでおり、安来市教育委員会としても調査を早急に実施する必要があるという結論に至り、このため、昭和59年度より国庫補助を得て教吳寺跡とされる野方町周辺の発掘調査を実施することとなった。

注1 加藤義成『校注 出雲國風土記』 P.108 1965年

2 「出雲國風土記考」「出雲國風土記解」については美保関町横山宏充氏のご好意により借用させていただいた。

3 鳥根人学が所蔵している。

4 加藤前提告P.107

II 章 歴史的環境

今回調査を実施した野方町周辺は寺院及び仏教関係の遺構のほかは横穴が1基所在することしか分っていない。しかし、野方町在住の稻田恒氏所蔵の土器の中に弥生時代前期の土器と考えられる箇描き沈線の土器片や高畠遺跡でみられる口縁端部が段状を呈する蓋坏の須恵器片を確認した。稻田氏所蔵の土器はこの地域で人間の生活が古く弥生時代、古墳時代から現在まで至っていることを知る資料である。

寺院関係の遺構としては、野方町字半畠と折坂町字鎌尾に瓦窯がある。前者を教吳寺1瓦窯、後者を教吳寺2瓦窯としている。前者は窯が部分的にではあるが確認できるが、後者は消滅している。真ヶ崎の神祇神社には心礎が小祠の台石とされている。この心礎がいつどこで見つかったかは知る資料はない。この心礎は地元では「田頬石」と呼ばれ、安来市田頬町に運ぶ石で作られていると見られる。心礎の規模は幅の正面径で165cm以上、その中に直交する径が158cmあり、梢円形を呈する。高さは約75cm、柱をうける施設は70cmある。この施設の中には径28.5cm、深さ6cmの小孔が穿たれている。

昭和47年に真ヶ崎内の薬師堂の北側にあたる位置を内田才氏が発掘調査を実施し、掘建柱建物、井戸、地下式壙が検出されている。掘建柱建物については日常使用する陶磁器の出土が多いことから僧坊の可能性が強いとされている。時期は鎌倉時代のもので、あるいは室町時代の再建があったものとされる。

仏教関係の遺物として特筆すべきは、埴仏が発見されていることである。これは、何体の仏像からなっていたかは不明確だが、左隅の1仏に位置するものである。大正時代に土地の所有者によって発見されたといわれる。当時、そこは漆畑であり、土はどこからか運んできた可能性もあるとされる。教吳寺等2瓦窯の極く近くである。

考古資料以外としては字名があり小門口（沢町）・大門（折坂町）などという地名がある。しかし、これらが直接教吳寺と関係があるものかどうかは不明である。また、沢町ではあるがどいぞねという真ヶ崎と同一丘陵の南側の高まりには、長者が住んでいたという伝説がある。この部分は平坦な部分がかなりあり人工的な地形を呈している。現在、遺物はほとんど表採できない。

この様に寺院関係の遺跡、遺物がかなり所在する。この周辺に教吳寺であるかどうかは別として寺院跡があったことは確実であろう。

注1 島根県教育委員会「島根遺跡目録」 1968年

2 皇紀2600年記念で整備され、その時に正面部分が削られたとされる。

3 内田才氏の調査報告メモによる。 1972年

4 安来市野方町石倉延好氏所蔵である。昭和42年（1967年）に安来市指定文化財となった。

5 石倉延好氏談による。

教昊寺跡周辺地形図



図1 調査位置図

III 章 調査概要

発掘調査は心礎及び遺物の多数出土する野方町字真ヶ崎地内で実施した。この部分はすでに宅地化が進んでおり、調査を実施する部分がかなり限られた。そのような状況下で3つの調査区を設定した。第1調査($4 \times 4\text{m}$)を心礎が所在する神蔵神社の境内と接する南東側竹藪に設定した。第2($3 \times 5\text{m}$)、第3($3 \times 10\text{m}$)調査区は稻田恒夫氏の教示を得て瓦片が多数出土する部分に設定した。以下調査で得られた結果の概要について記することにする。

第1調査区

第1調査は心礎の南東約6mの部分から $4 \times 4\text{m}$ の調査区を設定した。心礎が所在する部分より1m低い標高約13mであったため地山の検出が早くできるものと考えていた。しかし、中世以後の大規模な開発が確認された。地表下1.7m(東側断面)が削平されている。そのため、花崗岩質の地山直上より陶磁器片が検出された。そして、その面より天上帝部の落ちた地下式壙を検出した。東西を主軸とする1辺約2.1mと南北約1mで地下式壙の約 $2/5$ が検出できた。深さは地山面より1.05mであり、地表面より2.5mである。入口はほぼ垂直に設けてあり直径約0.8mで地山を段状にして蓋を置くような施設があったものと考えられ、その上に割石、瓦片を置いたものと考えられる。庄面より約40cmの厚さで、入口より流入したと考えられる黒色土層が検出された。この部分はまず地下式壙が造

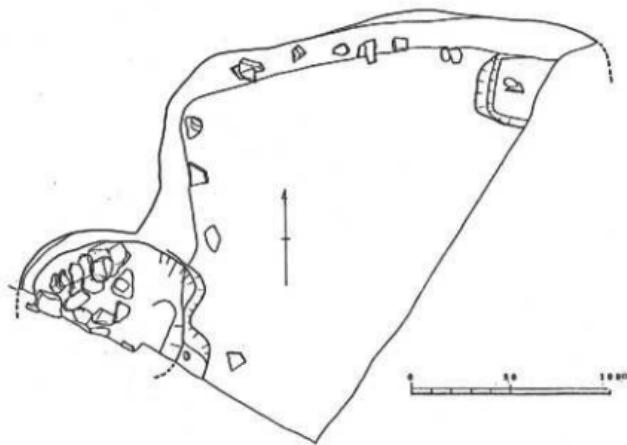


図2 第1調査区地下式壙平面図

られ、そして、天井部が落ち、その後、削平されこんどは土を盛って平らにしたものである。この部分では教吳寺と関係する遺構は検出できなかった。

第2調査区

第2調査区は 5×3 mの調査区を設定した北側の断面で、東側から約3mの所より落ち込む地形を呈する。この部分は褐色土層・黄褐色土層・黒色土層から成っており、特に黒色土層から土器片が多数出土した。この上層は出土遺物より古墳時代の上層と考えられるが、詳細は後の報告に譲りたい。

第3調査区

第3調査区は 3×10 mの調査区を設定した。この部分からは表土直下から瓦片が数多く出土した。また、調査区内の北側が約1mの落ち込みとなっており、南側は平坦面が広がるようである。落ち込んだ部分は多量の瓦片を検出した。軒瓦の出土状況は、後に教吳寺第IV型式軒丸瓦としたものがほぼ完形で1個体と破片が1個の2個、同じく教吳寺第II b型式軒丸瓦の破片が1個、また、教吳寺第III型式軒平瓦の破片が1個出土している。これらの軒瓦はいずれも流れ込みの土層中から検出している。南側に広がる平坦面は地山と同様な色調を呈すが盛土である。そのため、この明黄褐色土層の各土層内からは瓦片が少量ではあるが出土している。また、この平坦面には黒色土が入る上塙状の遺構が確認されている。そして、それに接して盛土中に瓦片が積みあげられた状態で検出されている。しかし、調査区が狭く、遺構の一部でしかないため、平坦面及び上塙状の遺構などについて、その性格を明確にするまで至らなかった。そのため、次回の調査においては、この部分を広範囲に発掘調査し、その性格を明確にしたい。

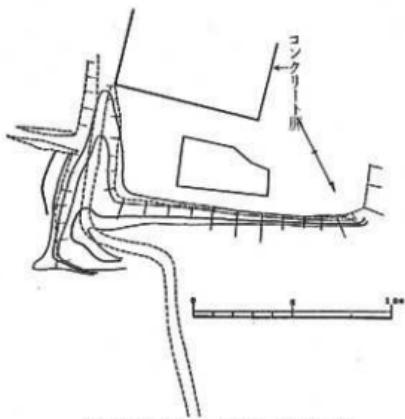


図3 第2調査区平面図

IV 章 瓦について

本章では、現在に至るまで野方町周辺から出土した軒瓦を集成・分類する。記述に際して使用した型式番号は、従来の研究成果をできる限り尊重したが、新たに判明した事実関係を踏まえ、一部に変更を加え、ローマ数字と小文字アルファベットによる表示法に統一する。ローマ数字は型式、それにつづく小文字アルファベットは、同文異范あるいは範の彫り直しと判断できるものを示す。なお、今までに公表された型式分類との異動は下表の通りである。すなわち、本書では、軒丸瓦を4型式6種、軒平瓦を3型式3種に分類する。

本書の型式番号	江谷 寛 分類 ^(注1)	近藤 正 分類 ^(注2)	内田 才 分類 ^(注3)
軒 丸 瓦	I a 型式軒丸瓦	軒丸瓦第1種	一重圓単弁蓮花文鎧瓦1号
	I b 型式 "	_____	同 上 2号
丸 瓦	II a 型式 "	軒丸瓦第2種	三重圓単弁蓮花文鎧瓦
	II b 型式 "	軒丸瓦第3種	二重圓単弁蓮花文鎧瓦
瓦	III 型式 "	_____	無圓単弁蓮花文鎧瓦1号・2号
	IV 型式 "	_____	一重圓単弁蓮花文鎧瓦3号
軒 平 瓦	I 型式軒平瓦	第2・3種対応軒平瓦	陰刻均正藏字文字瓦
	II 型式 "	_____	扁行楷草文字瓦
	III 型式 "	第1種対応軒平瓦	均正唐草文字瓦1号・2号

1. 軒丸瓦

教興寺 I 型式軒丸瓦 (第4図1・2, PL.4-1・2) 単弁蓮華文で、II~IV型式軒丸瓦と比べて中房が大きく、弁数の多いものをI型式軒丸瓦とする。弁の形状の違いによってa・bの2種に細分できる。I a型式(第4図1・PL.3-1)は単弁13葉蓮華文軒丸瓦。太い輪線で画した径5.5cmの中房内に1+8の蓮子を置く。弁は先の尖った匙形を呈し、中央に筋が通る。鎧の中点よりもやや弁端近くに粒状の隆起があり、鎧の稜線はこの隆起の上を貫通している。撥形を呈する間弁は中房までのびていない。外区には太い圓線がめぐらし、その外側は1段低い平坦面をなす。圓線上に推定26個の珠文を配する。焼成は堅緻で、胎土も細かく、暗灰色を呈する。瓦当裏面はナデで調整する。瓦当面径18.2cm、内区径15.5cm、文様の深さ0.6cm。I b型式軒丸瓦(第4図2, PL.3-2)は小片で、弁数や中房内蓮子数・外区の圓線上の珠文数は不明。弁は輪郭を突線で縁取り、撥形の間弁が中房までのびている。弁中央の隆起は明瞭で、隆起上の鎧は省略される。焼成は不良で、胎上は細かく、灰色を呈する。

教興寺 II 型式軒丸瓦 (第4図3・4, PL.5-1・2) 単弁8葉蓮華文軒丸瓦。外区をめぐる圓線が3重のものと2重のものとによってa・bの2種に細分できるが、同范の

^(注4) 可能性が強い。この場合、両者の違いは弁の彫り直しの結果とは限らないが、便宜上両者を分ける。*II a* 型式軒丸瓦（第4図3, PL. 5-1）は瓦当面径19.9cmで、太い圓線で画した径3.5～4.0cmの中房内に1+5の蓮子を置く。中房を画する圓線上には推定9個の珠文を配する。弁は輪郭を突線で縁取る。弁中央の筋と粒状の隆起は一体化し、細長く中房に向って尖る。外区には太い圓線が3重にめぐり、内側2本の圓線上には各々推定14個の珠文を配する。*II b* 型式軒丸瓦（第4図4, PL. 5-2）は、*II a* 型式軒丸瓦の外側の圓線を少くもので、瓦当面径16.7cm。中房を画する圓線上の珠文はやや不明瞭となっている。いずれも焼成はやや軟質で、胎土は細かく、黒褐色を呈する。筒部凸面は縦ケズリで整形。

教興寺Ⅲ型式軒丸瓦（第4図5, PL. 6-1） 単弁8葉蓮華文軒丸瓦。中房は木瓜形をなし、十字に4区画されて、各区画に1個の蓮子を置く。弁の子葉は高く隆起し、輪郭を縁取る突線は周縁に接する。撥形の間弁は中房からのび、外側は周縁と一体化して、あたかも弁自体が2重になっているようにも見える。*III型式軒丸瓦*を中房の蓮子の有無によって2種に細分する案もあるが、蓮子を持つ例でも、その隆起はきわめて僅かで、弁の形態や法量では差異は認められないので、本書では同範とみなしあり細分しなかった。焼成はやや軟質で、胎土は細かく、灰白色を呈するものと青灰色のものがある。瓦当面径14.5cm。

教興寺Ⅳ型式軒丸瓦（第4図6, PL. 6-2） 単弁4葉蓮華文軒丸瓦。太い圓線で画した中房内に1+8の蓮子を置く。太い突線で縁取った宝珠形の花弁を十字に配し、その間から同じ形の間弁が覗く。弁中央には山形の子葉が高く隆起する。弁と間弁と中房とは互いに接していない。外区には太い圓線がめぐり、その外側は1段低い平坦面をなす。焼成は堅緻で、胎土には細砂を含み、青灰色を呈す。筒部凸面は縦ケズリ、瓦当裏面から凹面にかけて縦ナデで整形する。*I～III型式軒丸瓦*と比べると、瓦当部と筒部との接合部に補強粘土を多量に使っている。瓦当面径17.0cm、内区径12.8cm、中房径4.0cm、文様の深さ0.5cm。

2. 軒 平 瓦

教興寺Ⅰ型式軒平瓦（第4図8, PL. 7-1） 陰刻均整唐草文軒平瓦。花頭形を垂下した幅広のC字上向型を中心飾とし、左右に戸手3葉を反転させずに2側づつ並置する。花頭形は上外区を画する沈線に接する。2本の沈線ではさまれた上外区には紡錘形の陰刻珠文、下外区と両脇区には陰刻鋸歯文がめぐる。両脇区は瓦当の天地方向に対し、斜め内側に立ち上る。平瓦部は薄手で、凸面がわで段をなし、瓦当面に向けて厚味を増す。瓦当下面は横ケズリの上をナデで整形し、瓦当上端は横ケズリで整形する。平瓦部凹面には模骨痕・糸切痕・布口圧痕、凸面には格子叩き目を残す。平瓦部は桶巻き作りで、広端部凸面に別の粘土板を貼りつけて瓦当部を成形したらしい。焼成は堅緻で、胎土は細かく、暗灰色を呈する。上弦幅27.7cm、弧深5.3cm、瓦当の厚さ4.9cm、内区の厚さ2.1cm、上外区の厚さ1.0cm、下外区の厚さ1.8cmである。

教興寺Ⅱ型式軒平瓦（第4図9, PL. 7-2） 均整唐草文軒平瓦。両脇上端から發し、3転する波状文の3つの空間に、対向させた蕨手2葉を配した唐草文。蕨手はすべて上方に巻き込んでおり、中央空間の蕨手は波状文から派生し、左右空間の蕨手は瓦当上端から派生する。一見、藤原宮式の唐草文軒平瓦と似ているため、これを偏行唐草文とする説明もあるが、文様構成は基本的に左右対称である。直線で画した下外区には鋸歯文がめぐる。頭の形態は直線頭。焼成は不良で明褐色を呈するものと、焼成堅緻で暗灰色を呈するものとがある。胎土は細かい。瓦当の厚さ5.0cm。

教興寺Ⅲ型式軒平瓦（第4図7, PL. 7-3） 均整唐草文軒平瓦。先端が2葉に分枝し、分枝点に小葉を置いた一種の忍冬蕨手を単位文様とし、左右両脇上端から中央に向けて各3転させ、4転目で対向する1葉蕨手の上端を山形文で結んだ蔓草状の均整唐草文。内外区を画す圓錐の4隅と周縁内側の4隅とを直線で結んで、外区を上下外区と両脇区とに区分し、上下外区に各9個、脇区に各2個の珠文を配する。頭の形態には段頭のものと直線頭のものとの2種がある。段頭のものは、瓦部が瓦当に向けて徐々に厚味を増し、瓦当から5.5cmのところで段をなして瓦当面に至る。瓦当の上下端は横ヶズリで整形し、瓦部凹面に布目圧痕を残す。焼成は堅緻で、胎土に細砂を含み、青灰色を呈する。上弦幅27.1cm、弧深5.7cm、瓦当の厚さ5.7cm、内区の厚さ2.6cm、上外区の厚さ2.1cm、脇幅2.0cm、文様の深さ0.4cmである。

(上原真人)
(永見英)

注1 江谷 寛「山陰における古瓦の系譜」『古代文化』第17卷第5号、1966年

2 近藤 正「『出雲國風土記』所載の新造院とその造立者」『日本歴史考古学論叢』

2、1968年（後に『山陰古代文化の研究』1978年 所収）

3 内田 才「仏教」「安来市誌」1970年

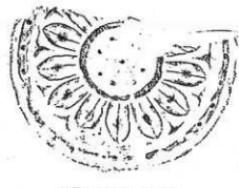
4 いずれも断片で、両者に共通する文様部分が僅かなので断定できないが、弁と中房蓮子との相互位置関係は完全に一致する。

5 内田前掲書。なを、近藤正も「この種の瓦はこまくみればさらに二種に細分される。」と述べている（近藤前掲書）。

6 瓦当右端部分を欠くため、波状文が4転する可能性も皆無とは言えない。しかし、3転に復原するとⅠ・Ⅲ型式軒平瓦の幅とはほぼ一致し、4転に復原すると幅が大きくなりすぎて不都合である。

7 近藤・内田前掲書。

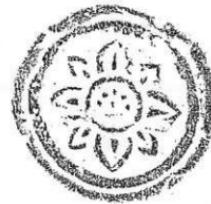
8 内田前掲書。



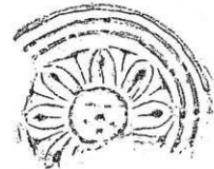
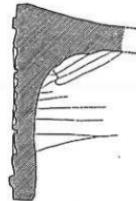
教興寺 | a 型式軒丸瓦



教興寺 | b 型式軒丸瓦



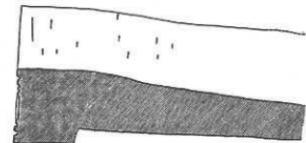
教興寺 Ⅰ型式軒丸瓦



教興寺 Ⅱ a 型式軒丸瓦



教興寺 Ⅱ b 型式軒丸瓦



教興寺 Ⅲ b 型式軒丸瓦



教興寺 Ⅳ 型式軒丸瓦



教興寺 Ⅴ 型式軒丸瓦



V章 まとめ

今回の3ヶ所の調査区では、寺院跡であることを示す明確な遺構を検出できなかった。しかし、第3調査区において、ほぼ完形の教吳寺IV型式軒丸瓦が反転した状態で出土した。この瓦が出土した平坦面は明確な版築状の土層を示するものではないが、盛土であること、この十層内から瓦片が積み上げたような状態で検出されていること、などのように寺院とのなんらかの関係が考えられる。しかし、もしこの平坦面が寺院のものであるとすれば、主要部分はすでに宅地の下ということになる。

教吳寺の所在地

ここで、教吳寺推定所在地の変遷について述べてみたい。前述したとおり江戸時代に書かれた「出雲國風土記録」、「出雲國風土考記」、「出雲國風土記解」のいずれの註解書も清水寺を教吳寺の有力候補にあげている。しかし、考古学的に見た場合、清水寺が8世紀まで通り得ることを示す資料があまりに少ない。また、風土記に記載された里程及び所在位置とは明らかに違う。この風土記の記載と考古学的見地から、後藤藏四郎は教吳寺の所在位置を「澤村の中、野方との堺に近き土居ゾネといふ所から、平安時代の唐草模様ある瓦片が出ることを見い出し、そこが教吳寺跡であろうと断定した」と記している。島根県史においても沢町の可能性が指摘されている。しかし、この2書ではまだ心礎などについての調査はなされていない。その後、山本清氏により「野方廃寺」が教吳寺の可能性があることが指摘された。また、昭和30年内田才氏により、心礎、壇仏、瓦などの考古学資料の本格的集成がなされた。しかし、「野方廃寺」という名称でも分かるように、大正時代に、沢町に所在すると考えられていた教吳寺が、1950年代に至って野方町真ヶ崎に所在するという見解に変わったことが分かる。現在、沢町土居ゾネでは遺物がほとんど表採できない状況であることが、このような推定所在地の移行になったと考えられる。しかし、上述の経過からわかるように、沢町上居ゾネに教吳寺が所在したという見解は完全に否定されたわけではない。研究史上の課題としてこの部分の発掘調査を実施し、寺院跡の有無を確認する必要がある。

時期について

今回の調査で出土した土器についての詳細は次回の報告に譲るが、須恵器のなかに底部が平坦で立ち上がりの短い环がいくつかある。また、高台付环も出土している。その外面底部には糸切痕のないものがあるが、蓋にかえりのあるものが共存していないので、蓋のかえりが消失した以後の高台付环と考えられる。また、前述の底部が平坦で立ち上がりの短い环は安来市久白町小久白遺跡の1号住居で見ることのできなかったものであることより7世紀中葉にまで遡る時期のものではないと考える。

地名について

奈良時代の寺院跡など歴史的な建物の場合、地名として残される場合がある。そのため、今後、真ヶ崎という大きな字名がどのように分かれるかなど、地名の調査も必要と考える。

土 垒 遺 構

神藏神社の境内には土壘遺構がある。約N-30°Wの方向を示す。主軸方向の長さで12m、幅4m、高さ0.75mである。この性格については明確ではないが瓦片が土壘遺構表面で数多く採集できることより寺院に関係する遺構の可能性が強い。この遺構は神社境内に所在したために保存されたのであるが、発掘調査を実施することも現段階では困難である。

瓦 散 布 地

瓦の散布地は沢町土居ゾネの北側にあるが、現在でも表面に多量の平瓦片が露出している。この瓦の集積は、陶磁器片が含まれていることより中世以後から近現代の間になされたものと考える。この瓦がどこから出土したかが問題ではあるがそれを知る資料は現在のところ見い出せない。

瓦 に つ い て

瓦についての歴史的意義は上原真人氏の付論に譲るが、今までの瓦当文様の分析に留らず、製作技法等についても明確にすることができる、「教吳寺瓦」の研究史においても画期となるものと考える。また、教吳寺I型式軒平瓦は大和大官大寺の影響を強く受けており、教吳寺あるいは野方町周辺に所在すると考えられる寺院が古代の中央政権と無関係では存在していないことを明確にした。

注1 「出雲国風土記考証」p.36 1925年

2 烏根県史(国司政治時代) p.706 1925年

3 「遺跡の示す古代出雲の様相」『出雲国風土記の研究』p.439 ~ 440 1953年

4 内田才「教吳寺に就いて」 1955年 安来市教育委員会

付論 教吳寺出土軒瓦の再検討

奈良国立文化財研究所 埋蔵文化財センター 上原真人

1. 研究略史と問題点

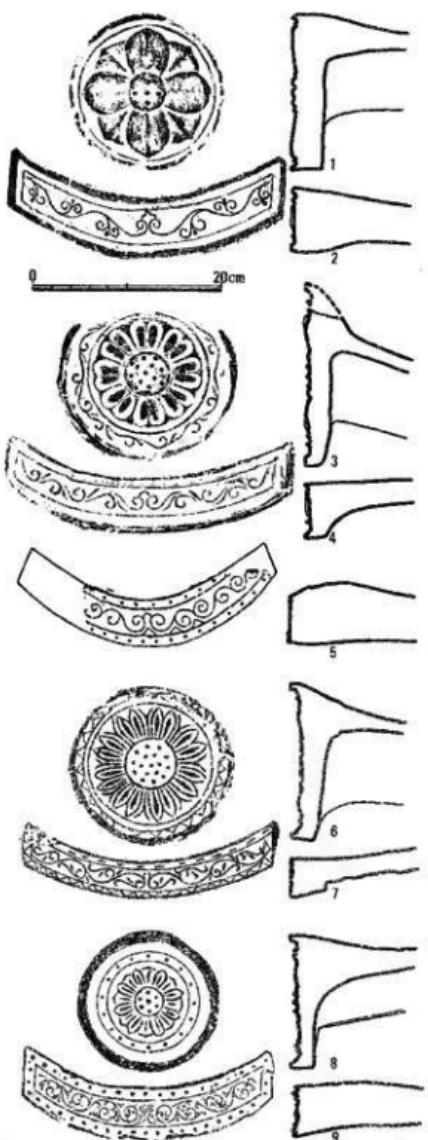
教吳寺では軒丸瓦4型式6種、軒平瓦3型式3種が採集されている。このなかで教吳寺創建時の瓦として、一般に広く承認されているのがIa型式軒丸瓦で、上淀庵寺式軒丸瓦とも呼ばれている。この種の軒丸瓦を最初に注目したのは澤野貞で、「奈良時代前期(645~723年)」の「巴瓦」の節のおより近くで鳥取県西伯郡上淀出土の軒丸瓦をとりあげ、「他に類例なき奇異なる意匠」と述べた。この類品が因幡国分寺・隠岐国分寺などの山陰地方各地に点在する事実は上田三平によって指摘され、その後、教吳寺例を加えて、江谷寛はこれを上淀庵寺式瓦と命名し系譜関係を明らかにした。特に上淀庵寺式軒丸瓦のなかで初現的な上淀庵寺出土例と教吳寺出土例とを対比し、「ほとんど同時期的なものではあるが、強いて考えれば上淀庵寺のほうが若干先行するものではなかろうか」と述べ、また、組合う軒平瓦に関し、上淀庵寺では軒平瓦ではなく、厚手の平瓦を軒平瓦として用いたと考え、教吳寺ではIII型式軒平瓦が初現的な上淀庵寺式軒丸瓦(Ia型式軒丸瓦)と組合い、I型式軒平瓦が後出的な上淀庵寺式軒丸瓦(II型式軒丸瓦)と組合うとした。

この江谷の考えは、『出雲國風土記』にみえる新造院を総括的に論じた近藤正によっても基本的に踏襲された。近藤はIa型式軒丸瓦とIII型式軒丸瓦とを教吳寺創建時のものとしている。教吳寺の創建は、『出雲國風土記』に上蝮首押猪の祖父である教吳僧が建立したことがあることから、同書編纂時よりも2世代さかのぼり、7世紀末から8世紀初頭、あるいは白鳳時代の中ごろ過ぎと考えられている。しかし、教吳寺創建時の軒瓦の組合せに関し、江谷・近藤説に従った場合、この創建年代に疑問が生ずる。真田広幸は近藤説を認めた上で、「創建時の軒瓦のうち軒平瓦は、左右から中心に向かって反転する均整唐草文という新羅的要素を有するが、上下外区と脇区に珠文がめぐるという新しい要素が見られる。このことから教吳寺の創建時期を考えれば、7世紀末~8世紀初頭より若干下る時期ではなかろうか。」と述べている。

1984年度の教吳寺第1次発掘調査では、顯著な遺構は確認できなかったが、第3調査区で多量の瓦が出土した。このなかには、教吳寺創建時のものと考えられていたIII型式軒平瓦1点と、教吳寺軒瓦のなかでは比較的新しいと考えられていたIIb型式軒丸瓦1点・IV型式軒丸瓦2点があり、他型式の軒瓦は共伴していない。軒瓦の出土量が少ないので、この事実を絶対視できないとしても、軒瓦の組合せと年代に関する従来の見解に再検討の余地が生じてきたことは否定し難い。以下、上記の事実を踏まえた上で、主として型式学的検討に基づいて教吳寺出土軒瓦の組合せと年代について若干の検討を加える。

2. III型式軒平瓦とその年代

III型式軒平瓦と同范と思われる軒平瓦は、松江市山代町の四王寺跡で出土している。ただし、四王寺跡ではIII型式軒平瓦は主体的でなく、主文様が酷似し、外区珠文帯を欠いた第5図2の軒平瓦が、単弁四葉蓮華文軒丸瓦(第5図1)と共に多数出土する。III型式軒平瓦



第5図 Ⅲ型式軒平瓦に近似した軒平瓦と対応軒丸瓦

と第5図2の軒平瓦とを比較した場合、前者が段顎を主体となし、後者が曲線顎を主体となす点が著しい違いである。製作技術に関しては確言できないが、いずれも平瓦一枚作りの成形台(凸型台)上で厚子の粘土板や粘土塊をつぎ合せて成形したものとのようである。

外区に珠文帯をもつⅢ型式軒平瓦が珠文帯を欠いた四子寺の軒平瓦に先行することは、近藤正・内田才が指摘している。^(注4)^(注5)したがって、この文様系譜の軒平瓦においては、等しく凸型台上で成形するが、断面形が段顎から曲線顎へと変遷したと推定できる。出雲において、この変遷が普遍性をもつものかどうか、また、普遍的ならばその変革の年代・契機はどのように位置づけられるのかという問題は、さらに多くの資料を検討した上で解決すべきであるが、解決の糸口となるのは、出雲国分寺創建時の軒平瓦の断面形において両者が共存し、しかも曲(直)線顎が主流を占めている点である。つまり、出雲国分寺造営を契機として、段顎から曲(直)線顎へ主流が移行した可能性が考えられる。

この変遷は、あるいは畿内の中央官衙系瓦屋(中央造営官司付属の瓦房)における造瓦技術の変革と密接な関係があるかもしれない。ごく大雑把に言うと、平城宮跡では、恭仁宮遷都(740年)以前につくられた軒平瓦では段顎が主流で、平城還都(745年)^(注6)以後は曲線顎が主体となる。国分寺

建立の詔が発布されたのはこの間のことである。恭仁宮・長岡宮・平安宮でつくられた軒平瓦は、ほとんどが曲線顎となる。つまり、中央官衙系瓦屋では740年代を境にして軒平瓦の顎の形態に大きな変革があったらしい。

以上の事実を踏まえた場合、Ⅲ型式軒平瓦の実年代が8世紀中葉を大幅に遡る可能性は少い。この結論は瓦当文様自体の検討からも導くことができる。

Ⅲ型式軒平瓦は、左右両脇から蔓状の歯手を反転し、中央で対向させた均整唐草文である。近似した唐草文は11世紀以降にもあるが^(注11)、内外区を分ける圓線の四隅と周縁の四隅とを結んで、珠文帯を上下外区と左右両脇区とに区分する文様構成は8世紀の軒平瓦に特有である。Ⅲ型式軒平瓦に近似した瓦当文様をもつ8世紀代の軒平瓦は、下野國分寺・同尼寺(第5図4)^(注12)・近江国守(第5図5)^(注13)・和泉信太寺(第5図7)^(注14)・平城宮(第5図9)から出土している。下野・近江例はともに飛雲軒瓦と密接な関係があり、軒丸瓦製作技術の特殊性などからも、両者の間に地域を越えた交流があったことは否定し難い^(注15)。実年代には異論があるが、8世紀中頃～後半以降である。

和泉信太寺例の中心飾はやや特異であるが、両脇から反転する単位文様の形態は下野・近江例よりもⅢ型式軒平瓦や四王寺の軒平瓦に近似する。上外区に紡錘形の珠文、下外区と両脇区に鰐齒文を配する点は、7世紀末～8世紀前葉の伝統を残しているが、これと組合う軒丸瓦(第5図6)は平城宮6225型式軒丸瓦に近似する。6225型式軒丸瓦は平城宮瓦編年第三期(745～757年頃)に位置づけられている。しかし、第5図6は中房の蓮子が3重構成で花弁が長くのびる点など古式の要素を持ち、組合う軒平瓦にも古式の要素が残る点、平城宮6225型式軒丸瓦が中央官衙系瓦屋の瓦当文様系譜から自生しにくい点などを考慮すると、第5図6・7は平城宮瓦編年第三期に先行する可能性がある。しかし、その可能性を認めた場合でも、8世紀第2四半期を大幅に遡ることはなかろう。

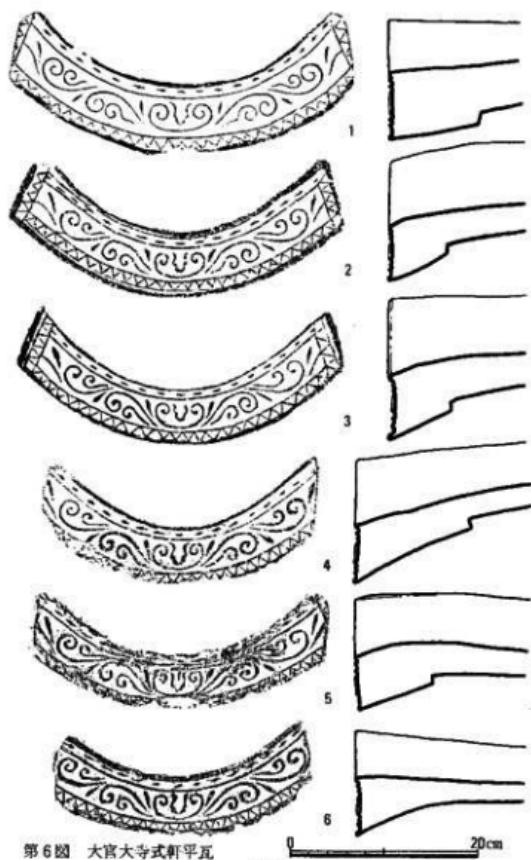
平城宮では、花頭形を垂飾したC字上向型を中心飾とし、左右に歯手3葉を反転させた均整唐草文軒平瓦が一般的であるが、6760型式軒平瓦(第5図9)は両脇から中央に向けて反転し中央で対向する均整唐草文軒平瓦である。6151型式軒丸瓦(第5図8)と組合って、神龍景雲年間(767～769年)に東院玉殿で用いたと考えられている。

以上、瓦当文様の比較においても、Ⅲ型式軒平瓦の実年代が8世紀中葉を大幅に遡る可能性は少い。要するに、Ⅲ型式軒平瓦は教吳寺創建時のものとは考えられず、「出雲國風土記」成立時に教吳寺で使用されていた可能性さえ少い。Ⅲ型式軒平瓦と組合う軒丸瓦に關しては確言できないが、四王寺における組合せ(第5図1・2)及び第3調査区における共作事実、胎土・焼成の近似性などを考慮すると、IV型式軒丸瓦と組合う可能性が高い。

3. 教吳寺創建時の軒瓦

Ia型式軒丸瓦が教吳寺創建時のものであることは、上淀庵寺式軒丸瓦の系譜論によつてほぼ論証された。しかし、その実年代は軒丸瓦の系譜論から導くことはできない。本節では、Ia型式軒丸瓦と組合う可能性の強い軒平瓦を抽出し、その実年代を検討する。

Ia型式軒丸瓦の「瓦当は極めて薄く、焼成も須恵質のように堅い。」これに対し、Ⅲ型



第6図 大官大寺式軒平瓦

は8世紀前半の興福寺式軒平瓦や前述した信太寺例(第5図7)をはじめとする和泉地方の軒平瓦(類例は南大和・紀伊にもある)にも踏襲され、唐草文自体は平城宮式軒平瓦に受け継がれている。しかし、(1)上外区に紡錘形珠文、下外区と両脇区に鋸歯文がめぐる。(2)瓦当の天地方向に対し、両脇区が斜め内側に立ち上る。(3)中心飾のC字上向型は幅広く、垂下した花頭形は大きい。という諸特徴をそなえた大官大寺式軒平瓦の実年代は、7世紀末～8世紀前葉の比較的短期間に集約できる。教吳寺のI型式軒平瓦では、陰刻表現であることと蕨手3葉が反転していない点が、大官大寺式軒平瓦との大きな相違点であるが、年代を大きく下降させる理由にならないだろう。

また、製作技術においても、I型式軒平瓦は平瓦部が薄手な段頸形態をとり、平瓦部凹

式平瓦の平瓦部は厚手で、さほど焼締っておらず、胎土も粗く、Ia型式軒丸瓦とはかなり異なる。もし、焼成・胎土の類似性からIa型式軒丸瓦と組合せ軒平瓦を想定するならば、I型式軒平瓦が第1候補として挙がる。

I型式軒平瓦は、大きな花頭形を垂下した幅広のC字上向型を中心飾とし、左右に蕨手3葉を反転させずに2個並置した陰刻均整唐草文を配し、上外区に紡錘形の陰刻珠文、下外区および両脇区に陰刻鋸歯文をめぐらせる。陰陽を逆転させると、この瓦当文様が大官大寺式軒平瓦(第6図)を比較的忠実に模倣していることが看取できる。大官大寺式軒平瓦は、7世紀末～8世紀初頭に出現し、上外区の紡錘形珠文と下外区の鋸歯文という要素

(注19)

面に模倣の枠板痕を残すなど、Ⅲ型式軒平瓦に比べて古式の要素をそなえ、7世紀末～8世紀前葉という瓦当文様に基づく年代観に矛盾しない。

ただし、I型式軒平瓦に関し、江谷寛はⅡa・Ⅱb型式軒丸瓦と組合うと述べており、内田才はⅢ型式軒丸瓦と組合うと考えている。胎土・焼成で見る限り、これを否定できるだけの積極的材料はない。教吳寺で採集された軒丸瓦は4型式6種、軒丸瓦は3型式3種だから、どのように組合せを想定しても軒丸瓦が余る。本稿で主題となし得なかったⅡ型式軒平瓦は、下外区鋸歯文という古式の要素はあっても、唐草文自体は形式化しており、頭の形態から見てもI型式軒平瓦よりも新しいことは確実だが、組合うべき軒丸瓦を特定できない。したがって、Ⅱ・Ⅲ型式軒平瓦がいずれもⅠa型式軒丸瓦と組合わないとすることは確実であっても、I型式軒平瓦がこれと組合うとは断言できない。上淀廃寺と同様、Ⅰa型式軒丸瓦には組合うべき軒平瓦が存在しなかったと考えることも可能だからである。

しかし、教吳寺における軒平瓦がⅠa型式を初現とし、Ⅰb・Ⅱa・ⅡbあるいはⅢ型式軒丸瓦へと変遷したと考えるならば、I型式軒平瓦がそのいずれと組合うと仮定しても、教吳寺の創建がI型式軒平瓦の年代（7世紀末～8世紀前葉）を遡ることはあっても、下降し得ないことは明らかである。要するに、瓦の年代観に基づく教吳寺の創建年次は、『出雲國風土記』の記事から推定できる教吳寺の創建年次にはば合致する。

4. まとめ

以上、軒平瓦を中心に、教吳寺出土瓦の実年代を検討した。以下、結論を要約する。

- (1) 従来、教吳寺創建時の軒丸瓦（Ⅰa型式軒丸瓦）と組合うと考えられていたⅢ型式軒平瓦は8世紀中葉以降のもので、教吳寺創建時のものではない。おそらく、Ⅳ型式軒丸瓦と組合うものである。
- (2) 従来、比較的新しいと考えられていたI型式軒平瓦は、大官大寺式軒平瓦の文様系譜下にあるもので、その実年代は7世紀末～8世紀前葉を大きく下降しない。もし、教吳寺創建時の軒丸瓦（Ⅰa型式軒丸瓦）に組合う軒平瓦が存在したと仮定するならば、I型式軒平瓦がそれにふさわしい。
- (3) (2)に基づく教吳寺の創建年代は、『出雲國風土記』から推定できる創建年代にはば合致する。

注1 関野 貞「瓦」雄山閣考古学講座 1930年（後に「日本古瓦文庫史」と改題し、「日本の建築と藝術」上巻 1940年に収録）

2 上田三平「因伯二州の寺院跡及古瓦」『史蹟名勝天然記念物』第6集第9号 1931年

3 江谷 寛「山陰における古瓦の系譜」『古代文化』第17巻第5号 1966年

4 近藤 正「『山陰國風土記』所載の新造院とその造立者」『日本歴史考古学論叢』2 1959年（後に「山陰古代文化の研究」1978年に収録）

5 池田満雄「出雲地方における古代文化的變遷」『日本考古学の諸問題』1964年

6 内田 才「仏教」『安来市誌』1970年

7 ただし、内田才はⅢ型式軒平瓦について、「教吳寺跡から出土した均整唐草文瓦にさわめて近似した字形が松江市山代町の山陰四王寺跡から出土している。（中略）出雲四王寺は『三代光緒』にみえるごとく貞觀九年（867）三條の末皮に編入するため改めにもとづいて山陰道間に建立された寺院のひとつである。このような事情からすれば出雲四王寺の屋根に用いられた瓦が教吳寺を形にしていることにより教吳寺が九世紀中葉存在していたという傍証になりうると思う。」と述べており（内田前掲書）、Ⅲ型式軒平瓦を新しいものとみなしている。

- 注8 真山広幸「奈良時代の蔚智岡に見られる軒瓦の様相」『考古学雑誌』第66巻第2号 1980年
- 9 西王寺出土瓦に関しては、鳥根県教育委員会の松本信雄氏、西尾克己氏の御原稿で実証させていただいた。既に公表されたものとして、近藤正前脚書、近藤正「寺跡」『鳥根県文化財調査報告書』第5集(鳥根県教育委員会 1968年)、倉吉博物館「山陰の古瓦展」1975年に収録されたものがある。
- 10 「奈良国立文化財研究所基盤資料」II 互編2 解説 1975年
- 11 上原真人「11・12世紀の瓦当文様の源流」『古代文化』第32巻第5・6号 1980年
- 12 鳥取県教育委員会「下野国分尼寺跡」鳥取県埋蔵文化財調査報告書第2冊 1969年
- 13 清賀県教育委員会「火跡 近江国西跡発掘調査報告書」滋賀県文化財調査報告書第6冊 1977年
- 14 和泉市教育委員会「信太寺跡発掘調査概要」和泉市上代町所山一 1979年
- 15 植山 康「古代瓦私見(1)一飛雲文軒平瓦について」「古代文化」第33巻第6号 1981年
同「古代瓦私見(2)一飛雲文軒平瓦の対応軒丸瓦」「同」第33巻第7号 1981年
- 宇都宮市教育委員会「水道山丘陵跡群」宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第7集 1982年
- 16 奈良国立文化財研究所「平城宮発掘調査報告書」第1次大極殿地域の調査 『奈文研学報』第40冊 1982年
- 17 広瀬和雄「信太寺跡出土の軒瓦」『奈智寺跡発掘調査報告書』大坂府教育委員会 1982年
- 18 大官大寺式軒平瓦は、奈良県高市郡明日香村小山の大官大寺跡出土瓦を基準とし、ほかに同村唐寺寺・同村飛鳥の飛鳥寺・奈良市大安寺跡ほかの大安寺・同村中門町ほかの元寺跡・大阪東成区山辺町の山辺寺跡などから同文例が出土している。大官大寺は「日本古記」「扶桑略記」「大安寺地圖記」などから天武朝に造営された古市大寺の後身と考えられていたが、発掘調査の結果、現在の大官大寺跡の創建は奈良朝であることが判明した。7世紀末～8世紀初頭に造営され、未完成のまま焼失したことが判明した。ここで出土した大官大寺式軒平瓦は6661A・B・Cの3種に細分され(第6回1～3)、最初に造営された企業およびこれにつく説堂では6661Aを、やや後で造営がおくれた塔や中門・廊廻では6661Bを七体的に用いたらしい。これと組合す軒丸瓦は、外区内密に縦目弦文を配し、中門に1・6の线条を引いた複瓦 A・B・Cの3種に細分)で、同じ組合せは山陰寺・大安寺でも認められる。大安寺の大官大寺式軒丸瓦は、本來、大官大寺に供給すべきものを、平城遷都にともなって搬入・転用したものであると考えられている。
- これに対し、飛鳥寺・元興寺・山辺寺の大官大寺式軒平瓦は6231型式軒丸瓦と共に存在しない。飛鳥寺の大官大寺式軒平瓦(『飛鳥寺発掘調査報告書』IV型式軒平瓦)は6661Bと同属であるが、川原寺式軒丸瓦の系譜をひく複瓦 A・B・C型式軒丸瓦(『同』 XIV型式軒丸瓦)と組合す可能性が高い。ただし、後者は飛鳥寺で大衆に出土しているのに対し、前者は少ない。成島寺 X・IV型式軒丸瓦では、窓キズ・筋の断面が複瓦で、その間に瓦当部接合法にかなりの差異が認められる。同じ窓が初期段階で使用された結果であろう。飛鳥寺では7世紀後半に至って、軒丸瓦に比べて軒平瓦の絶対量が少なく、「前建時瓦当のある軒平瓦を用いていなかったため、これにならない後方に軒平瓦を用いなかつた」と理解されている。したがって、大官大寺の創建が特徴統朝を測らない事実、平城遷都後の元興寺でも飛鳥寺と同様の軒丸瓦の組合せを採用している事実を考え合わせるならば、飛鳥寺X・IV型式軒平瓦は、飛鳥寺X・IV型式軒丸瓦のなかでも最も新しい段階の一派と組合すと考えられる。
- 飛鳥寺IV型式軒平瓦は6661Bと同属であるが、半瓦の規格が異なったためか、兩端区切りをとっている。同様の現象は、元興寺の大官大寺式軒平瓦でも認められる。元興寺の大官大寺式軒平瓦は6661A・B・Cとは別が異なる可能性が強く、類の形態によって3種に分類できる(第6回4～6)。この差は年代差と考えられ、一部は平城遷都時に飛鳥寺から運ばれたもの、一部は遷都後に新調されたものと理解されている。同属關係が不明確なだけではなく、少なくとも第6回6の曲線型のものは平城遷都以後の製品と考えられる。この軒平瓦の瓦当部は瓦当部と別造りで、瓦當に瓦当用粘土を押しつぶし、背面に乾燥済の瓦平端部をさし込んで、上に補強粘土をほどこす。この構造は中央官衙系瓦当の軒平瓦には存在せず、前述した和泉信太寺の軒平瓦や各地の「京窓系」と言われる軒平瓦のなかに類似の技術が認められるほか、平安時代後期の北九州や播磨の軒平瓦にも類似がある。これらを駆逐する余裕がないが、大官大寺式軒平瓦の外区文様帶の要求を受け難い信太寺の軒平瓦(第5回6など)のなかに同様の技術が認められる事実は、大官大寺式軒平瓦のなかでも最も新しいと思われる第6回6の下記が、8世紀第2四半期以前にあることを示すと理解してよからう。要するに、畿内の大官大寺式軒平瓦の年代は、7世紀末～8世紀前半と考えてよい。
- 【文献】奈良国立文化財研究所『飛鳥・山辺宮跡発掘調査報告書』5～13 1975年～1983年
千葉道場「大官大寺跡」「仏教藝術」116号 特集・古代寺院の発掘調査 1977年
井井秀太郎「大和上代寺院」大和史学会 1932年
山本忠尚「大安寺の屋瓦」「大安寺史・史料」大安寺史編集委員会 1984年
奈良国立文化財研究所「飛鳥寺跡発掘調査報告書」奈文研学報第5冊 1968年
元興寺仏教民俗資料研究所「元興寺古瓦調査報告書」 1973年
- 19 森 邦夫「興福寺式軒丸」「文化財叢書—奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集」1983年



野方町 真ヶ崎遠景



神藍神社土塁遺構



第 3 調査区



教興寺第IV型式軒丸瓦出土状況



第 3 調査区落ち込み



塔 仏



心 碑



心 碑



軒丸瓦第 I a 型式



軒丸瓦第 I b 型式



教興寺軒九瓦第 II a 型式



教興寺軒九瓦第 II b 型式



教興寺軒丸瓦 II 型式



教興寺軒丸瓦 IV 型式



教興寺Ⅰ型式軒丸瓦



教興寺Ⅱ型式軒丸瓦



教興寺Ⅲ型式軒丸瓦

教 員 寺 一

1985年

発行 安来市教育委員会

安来市安来町 878-1

印刷 有限会社 松浦印刷

安来市安来町 1,181